

「整はず候」歌と「聞えず候」歌：冷泉為村の批語 と褒詞（一）

久保田，啓一
広島大学文学部助教授

<https://doi.org/10.15017/9384>

出版情報：語文研究. 86/87, pp.105-116, 1999-06-04. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「整はず候」歌と「聞えず候」歌

——冷泉為村の批語と褒詞（一）——

久保田 啓 一

一

和歌指導の主要な部分を作品評価が占めるのはいう迄もなく、師匠の手にかかって瞬時に面目を一新した自作の変貌ぶりと師の評とを重ね合わせる作業の積み上げこそが和歌修業そのものといってよい以上、弟子は一首でも多く師の合点を受け、褒詞をかち取ろうと努めたはずである。そして表現面での添削指導と、合点という形での評価とを兼ね備えた一次資料としての点取詠草についても、筆者はすでにいくつかの検討を重ねて来て、師弟相互の表現意識、門弟同士の競争意識、あるいは時によっては介入したかもしれない師の好悪の感情が成績を左右する場合もあったであろうことなどを如実に知り得る点を指摘し、改めて価値の高さを確認している。¹⁾ 本稿ではこの前提の上に立って、主として師の批語・褒詞に

着目し、帰納的にその内容を確定しながら添削の意味を考え、指導する側の意識がどのように評価に反映するかを検証してみたい。勿論批語にせよ褒詞にせよ断片的な短い言葉に過ぎず、抽象的で内実が窺いにくいという弱点をともに有する点では限界があるけれども、これが作品鑑賞と評価の唯一の表明である以上、曖昧かつ自在な表現の奥にあるはずの師の好み、即ちどのような歌を称揚し拒否するかを一読のうちにはほとんど直感的に判断したのである。指導者の感覚に出来る限り迫る努力はなされなければなるまい。体系化は困難と思われるが、しばらくこの試みを継続してゆく所存である。

扱う対象は注（一）の諸論に直結させるべく、冷泉為村の添削・合点・褒詞・批語を有する門人の詠草類に限定する。特に拙稿④で具体的な表現論に着手した次の二点を中心に扱う。

・ 『片玉集』前集卷三十四所収「宝曆十二年中御点取和

歌之写」(以下「宝曆十二年点取」と略す)

・『片玉集』前集卷三十五所収「宝曆十三年中御点取」并当座和歌之写」(以下「宝曆十三年点取」と略す)

なお、必要に応じて他の添削資料も参看するが、個々の十分な調査なしに添削から得られる情報として等し並に扱うのは、せつかくの一次資料の価値を互いに損ないかねず、慎重な態度が要請される。が、一方では成立事情の異なる資料を比較の対象としてぶつけることで、一つの事実からは見えないう世界が図らずも現出する可能性もある。扱いには十分配慮しながらも、広汎に用例を集める際には積極的に利用する立場をとりたい。

ではどのような批語・褒詞を俎上に載せるか。一概に批語・褒詞といっても、両者の性格と表現論に資する情報量とは大きな違いがある。まずその多彩さで褒詞は批語に太刀打ちできない。「宜候」「おもしろく候」「可然候」「尤候」などの抽象的にすぎる言葉が書き添えられる程度で、どの点が評価できるのかを詳述する褒詞はまずあり得ないのである。

一方の批語は、歌中の表現に対する違和感の表明「如何」や、言葉の働きの無効を指摘する「無詮」、表現の欠点を語に即して説明する「あしく候」「不落着候」「不優美候」「聞よからず候」「耳にたち候」の類、また趣向に関わる「求過候」「うとく候」「少候」「たくみ過たり」などというように、指導する側の観点に従って様々に変化する。だからこそ指導を受ける

側にとっても批語の方が勉強になったはずであり、表現論を志す立場にとっても貴重ということになる。褒詞は、いってみれば門人を鼓舞し、作歌意欲を持続させるための方便に過ぎないのかもしれない。しかし門人にとってはやはり大きな目標であったし、自己満足の支えとしてなくてはならないものであったに違いない。

このような批語と褒詞であれば、まずは批語から検討に入る方が捷徑となろう。最終的には為村が評価するのはどのような和歌だったかが問われるべきであろうが、そのための踏まえるべき前段階として、為村はどのような和歌を嫌ったか、受けつけなかったかを見てゆく。その際、細部の表現に対して成された批語はひとまず措き、一首全体の評価を示した批語を有する和歌を取り上げる。無論、当該和歌と批語の解析に必要な他の細かい批語は検討の範囲に入る。しかし、例えば為村の門人宮部義正が『義正聞書』において、「詠草に批言うけ給りたること葉」として「花むらさき不₂宜」以下二百項余を書き並べても、批語の対象となった句のみを掲げて一首全体を出さなかったことで、聞書の実用性と学術性を著しく損なっていることからわかるように、部分的な句に対する批語をどれだけ積み重ねても、一首の読みに収斂してゆかなければ意味がないとの自覚は必要であろう。

「宝曆十二年点取」五九八首、「宝曆十三年点取」七四四首のうち、「一首」もしくは「一躰」という言葉を批語中に含むのは八首。細かい字句が問題なのではなく、一首全体、即ち一首の明快さや趣向の立て方の点で為村の感覚に障ったということになる。それらの和歌を、題・作者名・点取の名称・実施月日(月のみの場合あり)を書き添えつつ以下に列挙してみよう。⁽³⁾

「宝曆十二年点取」

a あげまきがうたへば一首とくのはずぬつて笛竹のこゑおもしろき里の一

ふし(雑声)、長谷川安卿、十首御点取、三月)

b おしと思ふこゝろは人もとゞめえ一首聞えかね難で何別路にくれまどふ

らむ(惜別恋)、津村正恭、五首御点取、五月十一日)

「宝曆十三年点取」

c 戸ざしをもわするゝよには鳴鳥一首あしく候もそらねとなりし関の明

がた(関路鶏)、長谷川安卿、三首御点取、二月十四日)

d 言の葉の花ほとゝぎす月雪一首好しからず候につもれるとしのくれおしぞ

思ふ(歳暮)、滝内如明、当座百首、五月)

e 道のべやたゞ一もとにさくむめの木りをうつすごとにかほるそでの

春風

(路海)、津村正恭、三首御点取、正月十一日)

f 絶なむと人やはいひし偽一首聞え難のことはなりと我はたのまん

(偽恋)、津村正恭、二首御点取、八月十四日)

g 山ざくらたがまことより咲初一首むつかしてちるを化なるよにおしむ

らん(惜花)、成島和鼎、二首御点取、八月十一日)

h 友さそふ浪に入日もほのかなる沖一首の秋心よからず候すへだて、千鳥なく声

(夕千鳥)、長谷川安卿、七首当座、十一月九日)

計一三四二首の中から選び抜かれた、為村にとつての「悪歌」としては代表的な存在とみてよいであろう。もっともdの如明の歌は一応合点を貰いながら批語が施された。この歌を含む当座百首は、「曉立春」から「祝言」までの百題を長谷川安卿・成島和鼎・近藤孟卿・近藤保好・滝内如明・北角茂棟・津村正恭・横瀬貞臣の八人で分け、一題あたり二首ずつ詠進して、例外なく一題につき一首の合点を受けた結果として存在する。そしてこのうち、合点がありながら褒詞ならぬ批語を施された唯一の例がdの歌なのである。為村は「歳暮」の如明の二首をともに無合点にするには忍びず、いわば儀礼

的に「言の葉の」の歌に点をかけた。しかし無条件に付したわけではないと言明すべく、本当は合点に値しないほどの根本的な欠陥があることを批語で示さざるを得なかったということか。以上のような村度をすれば、dの歌も実質的には「悪歌」と見なして構うまい。

さて、この八首の作者にまず注目してみると、興味深い事実が浮かび上がる。即ち、八首中、長谷川安卿と津村正恭が各三首ずつで計六首を占めるということである。八首が為村には根本的な欠陥を有する歌と映っていたのであれば、その七十五パーセントを安卿と正恭が占めているというのも重要な意味を持つ。つまり安卿と正恭の歌風には為村に否定されやすい要素があったらしいという推測が成り立つのである。

このうち正恭については、「宝曆十二年点取」の合点取得率を調査して正恭の最下位に近い低調ぶりを指摘した注(一)所掲拙稿④の論とも軌を一にする。また安卿についても、同稿で為村及び安卿周辺の同門歌人達から安卿が疎外される傾向にあり、為村も安卿の作や難陳について、他者に対するのと比較してやや厳しい態度で臨んでいるのではないかと想定したが、正恭とは違って合点の取得率では上位に属しながら為村の酷評を受けやすくもあるという安卿の存在が、合点と批語・褒詞との関係の複雑さを示唆するかのようである。拙稿④では、合点率の低さにもかかわらず褒詞が集中しがちであった和鼎の特異さに注目したが、これとちょうど正反対の

立場にあるのが安卿ということになる。このように各人の歌風のはらむ問題点にまで発展してゆく可能性があるが、ここではまず為村側に視点を定めて見て行きたい。a、hの八首の「悪歌」たる所以を考えて行くのである。

ただし、八首すべてを詳細に吟味する紙幅の余裕がない。そこで内容に即して批語を、①一首の整合性や意味の通りにくさを指摘する理的な批語、②嫌悪を主体とする感覺的な批語とに大別し、本稿では①に属するa「一首とゝのはず候」、b「一首聞えかね候歎」、e「一首とゝのはず候」、f「一首聞えず候」の四例を分析し、残りのは後者に委ねたい。①にとりあえず限定するのは、問題の所在が明らかやすく、また②の批語の根本には言葉の用法に関する問題が当然踏まえられているから、①の検討こそがまずは基本となると考えるためである。

まずは「一首とゝのはず候」を見てみよう。

三

aの「雑声」という題は頻繁に用いられるものではないらしく、便宜的にCD-ROM版『新編国歌大観』で検索しても『持明院殿御歌合 康永元年十一月廿一日』『柏玉集』『霞関集』にしか見出せない。為村門の内藤正範の作はこの場合論外であり、『持明院殿御歌合』も流布の程度から考えて安卿

達の目に触れた可能性はないであろう。その点、『柏玉集』雜一六五四「人かへる夕山かぜもさわざたつちりのうちなる市（よ）のこゑ（よ）」は普及の度合からいって作例検討の対象となつたかもしれないが、「雑声」の本意に強い拘束力はなく、「人かへる」の歌にのみ帰するような表現上の統率力もない以上、中世に確立した題の本意に違背する旨の指摘でないことは確かのものである。もっと近いところから対比の相手を求めなければならぬ。

aの歌を含む「十首御点取」では、正恭が、

山水のしらべこと成声よりやふかきこゝろもきゝかよひ
けむ

の歌に合点を得た。また新日吉神宮蘆庵文庫蔵『冷泉家点取写』の寛保二年十二月の点取でも、

世の中よたが夕暮のかねの声あすはきかざる人もあら
ん 昌輔

波風もおさまれる世の声なれや友よびかはしうたふ舟人
師周

八の声のあるが中にも糸竹のしらべはことに聞ぞふるさ
ぬ 清基

の三首に合点があった。「山水のしらべこと成声」や「夕暮のかねの声」、「おさまれる世の声」と聞きなす舟人の歌、それに「糸竹のしらべ」と素材はさまざまであつて、ここでもあらゆる「声」を許容する為村の態度は明快といつてよい。さ

らに、aの歌の主要な構成要素である「あげまき」と「笛竹のこゑ」のとり合わせについて見ると、中世までは例に乏しく、次に掲げるように武者小路実陰『芳雲集』あたりから豊富に詠まれ始めたとおぼしく、その意味では近世的な表現と見えるかもしれない。『芳雲集』の和歌を引いてみる。

あげまきも行く道ならし吹きむかふ野風に笛のねもかよ
ひきて (四一五六・「行路風」)

行末は入日にみえてあげまきの吹く笛遠きのちの夕暮

(四七三二・「野外眺望」)

これら牧童の吹き鳴らす笛に焦点を当てた歌が典型となつて、近世を通じ両者の配合は普遍化されていく。その点ではAの安卿の歌も同類といえよう。為村が「とゝのは」ないとした理由は「あげまき」と「笛竹のこゑ」を合わせた趣向にはない。

ここで批語「一首とゝのはず候」の書かれた位置に注目する。と、「うたへばつけて」の二句目に留意せざるを得ない。「あげまきがうたへば」と詠じたところで安卿の視点は、「つけて」、即ち歌に合せて奏でる「笛竹のこゑ」に転じ、そのまま「笛竹のこゑ」の興趣を詠嘆しつつ終わっている。安卿の狙いは、「あげまき」が歌い、「笛竹」が伴奏するという設定にあつたようだが、二句目の途中からはもっぱら「笛竹のこゑ」の賞美にのみ向かつて「あげまき」の歌声は中途半端に取り残されてしまった。『芳雲集』の例に見られるように

「あげまき」に笛を吹かせれば難なくまとめられたはずの世界が、安卿の工夫によって二つに分裂してしまった。「うたへば」と「つけて」との間に生じた断裂を為村は見逃さなかったのである。

eの正恭歌は、下句を「木ごとにかほるそでの春風」から「かほりをうつすそでの春風」へと訂する添削と、「一首とゝのはず候」に続く「にもあたり候」という字句の存在が推測をより容易にする。一読して首をひねらざるを得ないのは、路傍に「たゞ一もとに」咲く梅が「木ごとにかほる」という状況の不可解さであろう。また、袖に吹く春風が梅の香を運んで来るのだから「かほりをうつす」とした方が結句との関係が緊密になる。「木ごとにかほる」のままでは、「たゞ一もとに」との矛盾、結句への続きの曖昧という二重の欠陥が残されるわけであり、為村の指摘は首肯できる。さらに「一もとに」と「木ごと」の重複を加えれば正恭の感覚の鈍さを否応なく突きつけた体の添削となる。「にもあたり候」は、こういった正恭の無神経に我慢ならなかった為村のとどめの一言であった。

以上、aとeの二例から知られる「一首とゝのはず候」は、どうやら調べの乱れを意味するのではなく、一首の眼目を一点に収斂させる方向性を阻害する言葉の採用に関わる批判の言だったようである。「うたへばつけて」と「木ごとにかほる」に共通するのは、一首を根こそぎ倒してしまう程の安易

な言葉の選択と組み合わせなのだった。そして、これらの一句がいかに一首全体の整合を損なうかに思い至らなかった安卿と正恭への、為村の叱責のほとぼしりが「一首とゝのはず候」の言となった。二つの表現が、部分的な修正ではいかんともしがたい本質的な欠陥を有していたからこそ、為村は一首すべてを問題としたのであろう。

四

b「一首聞えかね候歎」とf「一首聞えず候」は、前者が断定を避けている点で若干表現を異にするが、いずれも「聞えず」との概念で共通する。また、ともに正恭の作であることから、正恭の詠出能力の程度を考えさせられる。両歌とも一首の意味がわからない点を指摘しているのであろうが、ここではまず、一首全体ではなくて部分的な表現に対して「聞えず候」もしくは「聞え候」と評した事例を検討して批語の内容を確認し、その上でb・f二首に向き合うという方法を探る。為村にとって意味のわからない表現とはいかなるものかを改めて見ておくことは無駄ではないと考えるからである。なお、「聞よからず候」という批語は、類似してはいなくても内容は異なるようなので、検討は別の機会に譲る。「宝曆十一年点取」「宝曆十三年点取」の中で関連する歌は次の通り。

i 此ごろの涼しき月にあくがれてたれも朝の床やおきつき
き〔夏朝〕、成島和鼎、三首御点取、宝曆十二年六月十四日

j さびしさも誰とか見まし山ふかみ木のまの月の秋のあはれを〔深山月〕、津村正恭、三首御点取、同九月十四日

k 岩がねにすみゆく月をせき入れてよるこそまされ滝のし
ら糸〔滝月〕、長谷川安卿、二首御点取、宝曆十三年八月十四日

l 霜ふりし昔をおもふ袖の上によどるも寒き在明の月〔冬
暁月〕、磯野政武、七首当座、同十一月九日

m めづらしな冬待つて言の葉もよにつもるべき峰の初雪
〔山初雪〕、森下政恒、七首当座、同

n 朝まだきたれあとつけて山里につま木の道の雪は分けん
〔山家雪朝〕、津村正恭、二首御点取、同十一月廿四日

o 等閑にあらぬものから水ぐきのたより計はみるもうらめ
し〔寄筆恋〕、森下政恒、二首御点取、同十一月十四日

あと、宝曆十三年五月に正恭・政恒・安卿・和鼎・如明の五人が詠じた「同詠一卷」十首に対しても、為村は「いづれもよく聞え候」と書き添えているが、これには合点も添削も

ないなど、他の資料と同列に扱うのが無理な面があり、褒詞が具体的な情報を含まないという限界もあるので、この十首は検討の対象外とした。

i 「此ごろの」の歌。『万葉集』卷十夏雑歌・一九四九「ほととぎす今朝の朝明に鳴きつるは君聞きけむか朝眠か寝けむ」と『後撰集』卷二春中・四八「竹ちかくよどこねはせじ驚のなく声きけばあさいせられず」の影響から、「あさい」は春の驚や夏のほととぎすとともに詠まれることが多く、表現としては朝寝ができない旨を嘆じるものが圧倒的であり、朝寝のために声を聞きそびれたと詠ずる歌も含め、驚やほととぎすを賞美する立場と「あさい」は両立しない概念として括ることが可能である。その点からすると、『衆妙集』三三二「なつの夜のみじかき程の名残とて朝いのまくらせぬ人ぞなき」〔夏人事〕のように、夏の短夜では不十分とて皆朝寝すると詠ずる歌は例外的で珍しいということになる。つまり朝寝を不可能とするほどに夏の夜の興趣は尽きないという立場で構築されるべきところ、細川幽斎は朝寝そのものに何ら後ろめたさを感じない人事の常識をそのまま歌に仕立てたという点で異色の存在となった。そして為村の「夏の朝のはよからぬ物也」という批語も、幽斎歌を例外とする通念に基づいた判断を示す。和鼎の歌は、短夜を彩る夏の月に夢中になつて夜更かした挙句、朝寝の床からなかなか起き上がれない人物を設定した。これはこれで現実的であつて不自然さはな

い。しかし、夜を徹して眺め続けてこそ夏の月を賞する心は十全に表現されるのであって、朝寝をしてしまつては何にもならない。合理的な筋は通つても、夏の月を本当に味わつたことにはならないというのが、「聞え候へども夏の朝はよからぬ物也」にこめられた為村の真意であつたらう。

j 「さびしさも」の歌。「誰とか見まし」は、『新編国歌大観』では第六巻の『金葉集』の初度本（静嘉堂文庫蔵本）巻三・二六一「顕仲卿母の歌」もろともに草ばのつゆのおきみずはたれとか見まし秋のよの月」（詞書「閑見月」といへる事をよめる）にのみ見出せるが、『金葉集』の二度本も三奏本も第四句は「ひとりや見まし」とある（『新日本古典文学大系 金葉和歌集 詞花和歌集』所収の三奏本『金葉和歌集』の本文を参照した）から、少なくとも顕仲卿母の歌に即して考えれば、「たれとか見まし」は秋の夜の月を誰とともに見ようかとのためらいを表明した言葉となる。問題は、この普遍的ではない表現を為村が正当に認識した上で「聞えず候」と断を下したのかどうかである。というのも、『後撰集』巻二十「慶賀・一三八四」なみたてる松の緑の枝わかずをりつちよを誰とかは見む」や『新古今集』巻七「賀・七一五」としごとにおひそふ竹のよよをへてかはらぬ色をたれとかはみん」以下の用例に見る「誰とかは見む」という類似した表現が「誰と見立てようか」の意で使用されるのを為村は当然知っていたはずであり、その知識からやや性急に「誰とか見まし」を否定し

た可能性もあるかと考えられるからである。しかし、たとえ用例は少なくとも「誰とか見まし」そのものは何ら疑問なく意味をたどることができし、為村が誤読をしたとも思えない。そして正恭も、「深山月」の本意からいって、誰もいない山奥の木の間の月を一人で見るといふ設定を踏まえていたには違いない。結句の「秋のあはれを」は「見まし」にかかるのであろう。ところが初句に「さびしさも」と置かれたことで「誰とか見まし」が完全に浮き上がってしまった。本来は「誰とか見まし」の所為ではなかったが、初句から読み下して行けば二句目に至って混乱するのは仕方がない。為村は「誰とか見まし」そのものの意味が通らないといっているのではなく、初句から続けてみて訳がわからなくなったのだと見ておきたい。

k 「岩がねに」の歌。指弾の相手は「よるこそまされ」である。『古今集』巻十二「恋二・六一〇」梓弓ひけば本末わが方によるこそまされこひの心は」以来、多く「寄る」と「夜」を掛けつつ相応に詠みつがれて来ている。「まさる」ものが何かを結句に明示するのも多くの例に共通するから、安卿の歌も「滝のしら糸」がまさることになる。岩でせきとめられた川面に月が映ることで滝の白糸の白さが一層増すというのが安卿の作意なのであろう。題が「滝月」だから月光の白さに焦点を据える安卿の狙いは納得できるところではある。しかしここで「夜こそまされ」といってしまうと、昼間の滝の流

れの美を損なうことになるが、安脚はそこまで考えたのだろうか。為村の批語の真意は測りかねるが、昼と対比させて夜のすばらしさを称する型とは相容れないとの主張が「よるこそまされ」を拒絶したと見ておく。

1 「霜ふりし」の歌。「やどるも寒き」の形は、『新拾遺集』卷六冬・六三一「枯れはつる草ばの霜の白妙にやどるも寒き月のかげかな」や『題林愚抄』冬中五四〇四「霜がれの尾花が袖の白妙にやどるもさむき冬のよの月」などに見られるように稀ではなく、さらに「のこるもさむき」「はらふもさむき」「みゆるもさむき」「いづるもさむき」「かすむもさむき」といった、動詞の連体形を受け、「寒き」へとつなげる「も」にまで調査の対象を拡張すれば、その類似例はそれこそ枚挙にいとまがないほど見出すことができる。為村が「やどるも寒き」の「も」に「聞えず候」との烙印を押すのは、耳慣れない表現であったからでは決してない。どうも為村は、この種の「も」の用法が好きではなく、安易に使用することに警鐘を鳴らす必要を感じていたのではないかと思われる節がある。例えば、宝曆十二年七月二十六日に行われた五首御点取において、近藤保好は「深夜萩」の題で「ともし火の光また、くさよ風にそよぐもすごき軒の下萩」という歌を詠じたが、為村は「そよぐもすごき」の右傍に「おもしろからず候」と書き入れており、批語の内容は異なるけれども、両者の「も」は同じ用法と見てよく、為村の姿勢はこの二例に関する限り

一致している。次には為村自身の作例から検証すべきだが、この一点に絞った詳考を必要とするから別稿を期したく思う。ただ、為村に密着しすぎる危険をあえて自みずにいえば、この「も」の用法について、多くの歌人達は語法に基づく表現効果を厳密に考慮した上で作歌に臨んだのかどうかという疑問がある。「も」でなければならぬ根拠より言い慣わしを優先させて採用するといった安易さが全くなかったかどうかを虚心に考えてみるべきであろうというのが筆者の率直な意見である。

m 「めづらしな」の歌。「よにつもるべき」によって冷泉門の繁栄と盛んな点取和歌活動を「山初雪」に絡ませるのが政恒なりの狙い目だったであろうし、為村への追従の気味も多分に感取できるが、為村は点取でこの種の思い入れを詠むのを嫌った。次の二例が何よりも雄弁に語ってくれる。

川上のいつもの花のいつかさてわが言のはのうへにかる
べき（河藻、成島和鼎、三首御点取、宝曆十二年五月
十四日）

なり出し国のはじめはかく社と海づら遠くむかふ島山
（海外山、成島和鼎、三首御点取、同閏四月十四日）

点取においては、「わが言のは」だの「国のはじめ」だとの大仰な表現で力む必要はなかった。題に即して本意を汲み取

り、安らかに詠み下せばよい。政恒の意図を理解しつつも点取への姿勢を崩そうとしない為村ならではの発言であろう。

○「朝まだき」の歌。題が「山家雪朝」ゆえ無理に「山里」としたのを見抜き、「つま木の道」によりふさわしい「山陰」へと転じて見せた為村の筆さばきは鮮かで、しかも柔らかくたしなめる口調に一層の自信が窺える。

○「等閑に」の歌。『古今集』巻四秋上・二〇六「まつ人にあらぬものからはつかりのけさなくこゑのめづらしきかな」以来、「あらぬものから」の上には名詞十助詞「に」が来るのが普通で、「なほざりに」のごとく実体のない、性質を表わす語が上接する例は非常に珍しい。為村が「つゞき」に言及する他の例を見ても、「等閑に」と「あらぬものから」との間隙を問題としているのは確かなので、為村の表現の規範からはずれていたものと見える。ただし、初・二句のみ取り出せば、特に意味の通じ難いところはなく、一首全体との関わり方がわかりにくい点を為村は気にして「聞えず候」としたのかもかもしれない。「等閑にあらぬ」のが相手から届いた手紙の内容か、それともこちらの気持ちなのか、この歌ではいま一つ明快に伝わらない憾みがある。

以上七首の検討で、為村が「聞えず」もしくは「聞え」ても欠点があると判断する際の思考形式は一応出揃ったのではなからうか。まず為村は、一句のみの問題として指摘するのではなく、常に一首全体における句の働きを見る。逆にいえ

ば、門人達の多くは類題集その他から句単位で表現を借りて来ることが多いので、句一つ一つはどこかで作例を見出せるし、意味をとりにくい句も存在し難いのである。大切なはその組み合わせであり、そこに力の差も生じる。「誰とか見まし」「等閑にあらぬものから」単独では解釈が可能でも、前後の句から始めて一首にまで解釈を及ぼそうとする時に障害となれば、その句に責任ありとする。次には、「朝の床」「よるこそまされ」のように、題の本意を損なう点からその働きに疑問が呈せられる場合がある。あとは特定の表現に対する違和感で、「やどるも寒き」の「も」のように安易に先行歌の類型に乗るのを戒めたり、題に合わせて無理に入れた「山里」の「里」に目をつけたりと、為村の微細な表現意識の発動に至る所で見ることができると、「よにつもるべき」は点取として大仰に過ぎる点に欠陥があったので、他とはやや問題を異にする。こうして見ると、安易に類型に頼らず、全体の中の位置を見極めて意味が通じることがどうかを吟味し、題の本意が生かされるように、反対にいえばぶち壊しにならないように詠めば、少なくとも「聞えず候」と為村はいわないはずである。

五

かなり迂遠な手つづきをとったが、ようやくbとfに立ち向かうことになった。まずbの歌。最初にお断りしておきた

いが、第三句を「人もとゞめえで」としたのは筆者の判断による。「人も」とあり、「とゞめえ」と続けば、「て」は打消の接続助詞「で」と考えるほかはない。ところが、なごり惜しく思う気持ちをとどめることができなければ、下句にいう「別路にくれまどふ」の言わば当然のことで、「何……らむ」と疑問に思う必要はない。一方、語法には無理があるのを承知の上で「人もとゞめえて」と見たらどうか。「おしと思ふ」心はどうにか留めることができ、なおかつ「別路にくれまどふ」のなら、その原因をいぶかしく思うとして一首は通じそうである。しかし「くれまどふ」のは「おしと思ふ」心を留めかねているからこそであって、こちらも矛盾を避けられない。結局のところ、この一首を初句から結句まで一貫して無理なく合理化することはできないのである。為村は恐らく「とゞめえで」「とゞめえて」二つの可能性も探った上で、自分なりの読みを定めようとした。しかしいづれにせよ正恭の作意を突きとめるには至らなかつた。どの表現に問題があるというよりは、一首全体が大きく孕む矛盾のために解決がつかなかつた。為村としては、これが悪いのだと具体的に指定しなかつたはずだが、できない。「一首聞えず候」と断言せずに「一首聞えかね候歟」と二重の婉曲を施したのも、特定の言葉に収束しない根本的な欠陥に何度も首をひねらされた過程で生じた迷いの反映に他ならないのではないか。表現の名手為村をこれほどまで困らせる正恭の歌は、ある意味

で貴重ですらある。

fの歌。「人やはいひし」の「やは」は、『新後撰集』卷十六恋六・一一八六「ひとすぢに身をうらむべき契かな人やはいひしものおもへとは」などの例でもわかるように反語である。だから「絶なむと人やはいひし」は、「もう終わりにしよう」とあの人はいったか、いやいいはしなかつた」とでも訳さなければならぬ。つまり相手は自分との仲をこれきりにしようとはいわなかつた、との判断ができ上がっている。ところが下句で、その言葉を偽りのものと頼みにして辛うじて希望をつなごうというのでは、何が何やらわからない。正恭は「絶なむと人やはいひし」を、相手の別れの宣告を人伝に聞かして、確かにあの人はそういったのかと念を押すように問い返したと意味づけたのである。為村は「絶なむと人やはいひし」までをすんなりと受けとめた。それは為村の理解する語法と作例に基づく当然の判断であつた。ところが三句の「偽の」に至って、為村は正恭の「人やはいひし」に対する誤解を悟る。矛盾の生じた起点は「偽の」と正恭が詠じた箇所だつたから、その傍に「一首聞えず候」と書きつける。事は「人やはいひし」に限定されない。一つの言葉の語義・用法の誤解が一首全体の骨格を根本からひっくり返すこともある。為村があえて一首の意味不明と断じたのも、そのあたりの注意を喚起する必要を痛感したからであつたろう。

それにしても、津村正恭の論われぶりはどうだろう。『片玉

集』に龐大な和歌・和文を営々と記録し続けることになる好学者にしてなお、正恭の歌語の運用能力には大きく見劣りする点があったのである。

六

一首が整っているか、意味が通っているかという二面から「宝曆十二年点取」「宝曆十三年点取」を中心に検討したが、先にも述べた通り、添削によって為村の好尚を見極め、彼之作歌との連関の程を探った上で為村の歌風の何たるかを明らかにするためには、触れ残した四首の和歌を手始めに、為村の感覚的な批語に向かわなければならぬ。好き嫌いを基調とする何とも名状しがたい概念を、為村に即してどこまで感得できるか、いささかの不安とともにひとまず筆を擱く。

注

- (1) 抽稿①「歌論と添削——冷泉為村の実作指導理念——」
『雅俗』創刊号、一九九四年二月二十八日、同②「近世和歌研究の問題点——表現論確立への一視点——」(『国学院雑誌』九五卷一—号、一九九四年十一月十五日)、同③「近世和歌の創作と批評の場——寛保元年の二つの点取を通して——」(『文学』季刊六卷三号、一九九五年七月十日)、同④「宝曆十二年江戸冷泉派の点取和歌(上)(下)」(『国文学攷』

一五四号・一五五号、一九九七年六月三十日・同年九月三十日) 参照。

(2) 引用は近世和歌研究会編『近世歌学集成(中)』(明治書院、平成九年十一月二十日) 所収の本文に拠る。底本は大阪市立大学森文庫蔵本。

(3) 和歌と批語については適宜濁点を施し、通行の字体に改めるなどの処置をとった。ただし批語の位置については、『片玉集』の本文通りとした。またa以下の記号のうち○で囲んであるのは、その歌が合点を受けていることを示す。

(4) 引用は『新編国歌大観』第八巻の本文に拠る。なお、和歌の引例は、特に断らない限り同書に拠った。

(5) 注1抽稿③参照。

(6) 引用は『日本古典文学全集 萬葉集三』に拠る。